

日蓮大聖人御書全集

うつぶさのようぼうごへんじ

内房女房御返事

新版
2030
〜
2035

うつぶさのにようぼうごへんじ

内房女房御返事

こうあん

ねん

がつ

にち

さい

うつぶさのにようぼう

弘安3年('80)

8月14日

59歳

内房女房

うちぶさ

ごしようそく

い

はちがつこのか

ちち

候

内房よりの御消息に云わく「八月九日、父にてそうらい

ひと

ひやつかにち

あいあ

候

おんふせりよう

じつかん

進

し人の百箇日に相当たつてそうろう。御布施料に十貫まい

そうろうないし

らせ候乃至あなかしこ、あなかしこ」。

ごがんもん

じよう

い

どくじゆ

たてまつ

みようほうれんげきよういちぶ

御願文の状に云わく「読誦し奉る妙法蓮華經一部、

どくじゆ

たてまつ

ほうべん

じゆりようほんさんじつかん

どくじゆ

たてまつ

じがげ

読誦し奉る方便・寿量品三十卷、読誦し奉る自我偈

さんびやくかん

とな

たてまつ

みようほうれんげきよう

だいみようごまんべん

うんぬん

三百卷、唱え奉る妙法蓮華經の題名五万返」云々。

どうじよう

い

ふ

おも

せんこう

ゆうれいせいぞん

とき

同状に云わく「伏して惟んみれば、先考の幽霊生存の時、

でしはる

せんり

さんが

しの

まのあた

みようほう

だいみよう

う

弟子遙かに千里の山河を凌ぎ、親り妙法の題名を受け、

のちさんじゅうにち

へ

なが

いつしろう

お

つ

とう

しかる後三十日を経ずして永く一生の終わりを告ぐ」等

うんぬん

い

えんぶ

ろてい

はつこつかり

じんど

な

云々。また云わく「ああ、閻浮の露庭に白骨仮に塵土と成る

りようぜん

かいじよう

ぼうこんさだ

かくずい

ひら

い

とも、靈山の界上に亡魂定めて覺蘊を開かん」。また云わ

こうあんさんねん

によでし

おおなかとみうじけいはく

とううんぬん

く「弘安三年、女弟子・大中臣氏敬白す」等云々。

そ

おも

いちじようみようほうれんげきよう

がつしこく

夫れ以んみれば、一乗妙法蓮華経は、月氏国にては

いちゆじゆん

しろ

つ

にほんこく

はちかん

一由旬の城に積み、日本国にてはただ八卷なり。しかるに、

げんぜ

ごしろう

いの

ひと

はちかん

いつかん

現世・後生を祈る人、あるいは八卷、あるいは一卷、ある

ほうべん

じゆりよう

じ

がげとう

どくじゆ

さんだん

しよがん

いは方便・寿量、あるいは自我偈等を読誦し讃歎して所願

と たも せんれい おお
を遂げ給う先例、これ多し。これはしばらくこれを置く。

とな たてまつ みようほうれんげきよう だいみようごまんべん うんぬん
「唱え奉る妙法蓮華經の題名五万返」と云々。この

いちだん の おも せんれい たず ためしすく

一段を宣べんと思つて先例を尋ぬるに、その例少なし。あ

いっぺんにへんとな りしよう こうむ ひと あ

るいは一返二返唱えて利生を蒙る人、ほぼこれ有るか。い

ごまんべん たぐ き

まだ五万返の類いを聞かず。

いっさい しょう わた みようじ みな

ただし、一切の諸法に亘つて名字あり。その名字、皆そ

たいとく あらわ れい せつ こしやうぐん もう

の体徳を顕せしことなり。例せば、石虎將軍と申すは、石

とら いとお せつ こしやうぐん もう まとたてのおとど もう

の虎を射徹したりしかば、石虎將軍と申す。的立大臣と申

くろがね まと い 徹 せつ こしやうぐん もう まとたてのおとど な

すは、鉄の的を射とおしたりしかば、的立大臣と名づく。

みなな とく あらわ いま みようほうれんげきよう もう そうろう

これ皆名に徳を顕せば、今、妙法蓮華經と申し候は、

いちぶはちかにじゅうはつぽん くどく ごじ うち おさ そうろう たと

一部八卷二十八品の功徳を五字の内に収め候。譬えば、

によいほうしゆ たま よろず たから おさ いちじん さんぜん

如意宝珠の玉に万の宝を収めたるがごとし。一塵に三千

つ ほうもん

を尽くす法門これなり。

なむ もう じ うやま ところ したが ところ ゆえ あなん

南無と申す字は、敬う心なり、随う心なり。故に、阿難

そんじゃ いっさいきよう によぜ にじ うえ なむ とううんぬん

尊者は一切經の「如是」の二字の上に「南無」等云々。

なんがくだしい なんみようほうれんげきよう うんぬん てんだいだしい

南岳大師云わく「南無妙法蓮華經」云々。天台大師云わく

けいしゆなんみようほうれんげきよう うんぬん

「稽首南無妙法蓮華經」云々。

あなんそんじゃ こくぽんおう たいし きようしゆしやくそん みでし

阿難尊者は、斛飯王の太子、教主釈尊の御弟子なり。

しやくそんごにゆうめつ　のちろくじゆうにち　す　かしようとう　いつせんにん　もんじゆとう

釈尊御入滅の後六十日を過ぎて、迦葉等の一千人、文殊等

はちまんにん　だいかくこうどう　しゆうえ　たま　ほとけ　わか　かな

の八万人、大閼講堂にして集会し給いて、仏の別れを悲し

たも　うえ　われ　たねん　あいだずいちく　ろくじゆうにち　あいだ

み給う上、「我らは多年の間随逐するすら六十日の間の

おんわか　かな　ひやくねんせんねんないしまつぼう　いつさいしゆじよう　なに

御別れを悲しむ。百年千年乃至末法の一切衆生は何をか

ほとけ　おんかたみ　ろくしげどう　もう　はつぴやくねんいぜん　にてん

仏の御形見とせん。六師外道と申すは八百年以前に二天

さんせんとう　と　お　しいだ　じゆうはちだいきよう　し

三仙等の説き置きたる四韋陀・十八大經をもつてこそ師

なごり　つた　そうら　われ　ごじゆうねん　あいだ　いつさい

の名残とは伝えて候え。いざさらば我ら五十年が間、一切

しyouもん　だいぼさつ　き　たも　きようぎよう　か　お　みらい

の声聞・大菩薩の聞き持ちたる経々を書き置いて、未来

しゆじよう　げんもく　せんぎ　あなんそんじや　こうざ　のぼ

の衆生の眼目とせん」と僉議して、阿難尊者を高座に登せ

ほとけ

あお

しもぎ

もんじゆしり ぼさつ

て 仏を仰ぐごとく、下座にして文殊師利菩薩、

なんみようほうれんげきよう

とな

あなんそんじや

う と

南無妙法蓮華經と唱えたりしかば、阿難尊者これを承け取

われき

こた

くひやくくじゆうくにん

つて「かくのごときを我聞きき」と答う。九百九十九人の

だいあらかんとう

ふで

そ

か

とど

たま

いちぶはちかん

大阿羅漢等は、筆を染めて書き留め給いぬ。一部八卷

にじゆうはつぽん

くどく

ごじ

おさ

そうら

もんじゆしり

二十八品の功德はこの五字に収めて候えばこそ、文殊師利

ぼさつ

とな

たも

あなんそんじや

菩薩かくは唱えさせ給うらめ、阿難尊者またさぞかしとは

こた たも

まんにせん

しyouもん

はちまん

だいぼさつ

にかいはちばん

答え給うらめ、また万二千の声聞・八万の大菩薩・二界八番

ぞうしゆ

あ

がつてん

の雜衆も有りしことなれば合点せらるらめ。

てんだいちしゃだいし

もう

しyouにん

みようほうれんげきよう

ごじ

げんぎ

天台智者大師と申す聖人、妙法蓮華經の五字を玄義

じつかん いっせんちよう

か たま

そうろう

こころ

けごんきよう

十卷一千丁に書き給いて候。その心は、華嚴経は

はちじつかん ろくじつかん しじつかん あごんぎようすうひやくかん だいじゅうほうどうすうじつかん

八十卷・六十卷・四十卷、阿含経数百卷、大集方等数十卷、

だいぼんはんによしじつかん ろつぴやくかん ねはんぎようしじつかん さんじゅうろつかん ないし

大品般若四十卷・六百卷、涅槃経四十卷・三十六卷、乃至

がっし りゆうぐう てんじよう じつぼうせかい だいちみじん いっさいきよう

月氏・竜宮・天上・十方世界の大地微塵の一切経は、

みようほうれんげきよう きよう いちじ しよじゅう みようらくだいし かさ

妙法蓮華経の経の一字の所従なり。妙楽大師、重ねて

じつかんつく しゃくせん な てんだいいご わた かんど

十卷造るを釈籤と名づけたり。天台以後に渡りたる漢土の

いっさいきよう しんやく しよきよう みな ほけきよう けんぞく うんぬん にほん

一切経、新訳の諸経は皆、法華経の眷属なり云々。日本の

でんぎようだいし かさ しんやく きようぎよう なか だいにちきようとう しんごん

伝教大師、重ねて新訳の経々の中の大日経等の真言の

きよう みな ほけきよう けんぞく さだ そちら お

経を皆、法華経の眷属と定められ候い畢わんぬ。ただし、

こうぼう じかく ちしようとう ぎ すいか ぎ のち

弘法・慈覚・智証等は、この義に水火なり。この義、後に

か たと ごきしちどう ろくじゅうろつかこく ふた しま

ほぼ書きたり。譬えば、五畿七道、六十六箇国・二つの島、

なか こおり しよう むら た はた ひと ぎゆうば こんこんとう みな

その中の郡と莊と村と田と畠と人と牛馬と金銀等は、皆、

にほんこく さんじ うち そな ひと か

日本国の三字の内に備わって一つも闕くることなし。

おう もう さん じ よこ か いち じ たて 様

また、王と申すは、三の字を横に書いて、一の字を豎さま

た よこ さん じ てん ち じん たて いち もんじ

に立てたり。横の三の字は天・地・人なり。豎の一の文字は

おう しゆみせん もう やま だいち 突 通 かたむ

王なり。須弥山と申す山の大地をつきとおして傾かざるが

てん ち じん つらぬ すこ かたむ おう な

ごとし。天・地・人を貫いて少しも傾かざるを王とは名づ

おう ふた いち しようおう にんのう てんのう

けたり。王に二つあり。一には小王なり。人王・天王これ

なり。二には大王なり。大梵天王これなり。日本国は大王の

ごとし、国々の受領等は小王なり。華嚴経・阿含経・

ほうどうきよう はんにやきよう だいにちきよう ねはんぎようとう いこんとう いっさいきよう
方等経・般若経・大日経・涅槃経等の已今当の一切経は

しょうおう たと にほんこくじゅう こくおう ずりようとう
小王なり。譬えば、日本国中の国王・受領等のごとし。

ほけきよう だいおう てんし けこんしゅう
法華経は大王なり。天子のごとし。しかれば、華嚴宗・

しんこんしゅうとう しよしゅう ひとびと こくしゅ うち しよしゅうとう くにぐに
真言宗等の諸宗の人々は、国主の内の所従等なり。国々

たみ み てんし とく うば と げこくじょう はいじよう
の民の身として天子の徳を奪い取るは、下剋上・背上

こうげ はじようげらんとう せけん おさ おも
向下・破上下乱等これなり。たといいかに世間を治めんと思

しんろせし くに みだ ひと ほろ たと き
う 志 ありとも、国も乱れ人も亡びぬべし。譬えば、木の

ね うご

えだはしず

たいかい

なみ 荒

根を動かさんに、枝葉静かなるべからず。大海の波あらか

ふね 穩

けごんしゅう しんごんしゅう ねんぶつしゅう

らんに、船おだやかなるべきや。華嚴宗・真言宗・念仏宗、

りつそう

ぜんそうとう

わ

み じかい

しょうじき

ち え

たつと

律僧・禅僧等は、我が身持戒・正直に智慧いみじく尊し

みすで

げこくじょう

いえ

う

ほけきよう

といえども、その身既に下剋上の家に生まれて、法華經の

だいおんてき

あ びだいじょう

のが

れい

くじゅうごしゅ

大怨敵となりぬ。阿鼻大城を脱るべきや。例せば、九十五種

げどう

うち

しょうじき

うち

ひととお

にてんさんせん

の外道の内には正直・有智の人多しといえども、二天三仙

じゃほう

う

つい

あくどう

のが

の邪法を承けしかば、終には悪道を脱るることなし。

いま

よ

なむ

あみだぶつ

もう

ひとびと

しかるに、今の世の南無阿弥陀仏と申す人々、

なんみようほうれんげきよう

もう

ひと

わら

欺

南無妙法蓮華經と申す人を、あるいは笑い、あるいはあざむ

く。これは、世間の譬えに稗の稻をいとい家主の田苗を憎む、
せけん たと ひえ いね 厭 やぬし たなえ にく

これなり。これ国将なき時の盗人なり、日の出でざる時の
こくしよう とき ぬすびと ひ い とき

うぐるもち

よう

ごうとう

とが

ちちゆう

じざい

鼯なり。夜打ち・強盗の科めなきがごとく、地中の自在

なんみようほうれんげきよう

もう

こくしよう

にちりん

値

なるがごとし。南無妙法蓮華經と申す国将と日輪とにあわ

たいか

みず

き

えんこう

いぬ

あ

とうじ

なむ

ば、大火の水に消え、猿猴が犬に値うなるべし。当時、南無

あみだぶつ

ひとびと

なんみようほうれんげきよう

おんこえ

き

阿弥陀仏の人々、南無妙法蓮華經の御声の聞こえぬれば、

いろ

うしな

まなこ

いか

たましい

あるいは色を失い、あるいは眼を瞋らし、あるいは魂を

け

ごたい

震

でんぎようだいしい

ひい

滅し、あるいは五体をふるう。伝教大師云わく「日出でぬ

ほしかく

たく

み

つたな

し

りゆうじゆぼさつ

れば星隠れ、巧みを見て拙きを知る」。竜樹菩薩云わく

みようじうしな やす じやぎたす がた とくえぼさつ い おもて

「謬辞失い易く、邪義扶け難し」。徳慧菩薩云わく「面に

しそ いろあ ことば あいおん こえ ふく はっさいい むかし

死喪の色有り、言に哀怨の声を含む」。法歳云わく「昔は

ぎこ いま ふくろう どううんぬん こころ し

義虎、今は伏鹿」等云々。これらの意をもつて知んぬべし。

みようほうれんげきよう とく 粗 々 もう ひら どくやくへん くすり

妙法蓮華経の徳、あらあら申し開くべし。毒藥變じて藥

みようほうれんげきよう ごじ あくへん ぜん ぎよくせん

となる。妙法蓮華経の五字は、惡變じて善となる。玉泉と

もう いずみ いし たま ごじ ほんぷ ほとけ

申す泉は石を玉となす。この五字は凡夫を仏となす。さ

かこ じぶ そんりよう ぞんしょう なんみようほうれんげきよう とな

れば、過去の慈父尊靈は、存生に南無妙法蓮華経と唱え

そくしんじようぶつ hito いしへん たま な

しかば、即身成仏の人なり。石變じて玉と成るがごとし。

こうよう しごく もう そうろう ゆえ ほけきよう い わ

孝養の至極と申し候なり。故に、法華経に云わく「この我

が二子は、すでに仏事を作しつ。また云わく「この二子と
は、これ我が善知識なり」等云々。

乃往過去の世に一りの大王あり。名を輪陀と申す。この王

は、白馬の鳴くを聞いて、色もいつくしく、力も強く、供御

を進らせざれども食にあき給う。他国の敵も胄を脱ぎ、

掌を合わす。また、この白馬鳴くことは白鳥を見て鳴き

けり。しかるに、大王の政や悪しかりけん、また過去の

悪業や感じけん、白鳥皆失せて一羽もなかりしかば、白馬

鳴くことなし。白馬鳴かざりければ、大王の色も変じ、力

おとろ

み

悴

はかりごと

うす

ゆえ

くにすで

みだ

も衰え、身もかじけ、謀も薄くなりし故に、国既に乱れ

たこく

つわもの攻

きた

なん

なげ

ぬ。他国よりも兵者せめ来らんに、何とかせんと歎きしほ

だいおう

ちよくせん

い

くに

げどうおお

みな

われきえ

どに、大王の勅宣に云わく「国には外道多し。皆、我帰依

たてまつ

ぶつぼう

げどう

ぶつぼう

し奉る。仏法もまたかくのごとし。しかるに、外道と仏法

なかあ

はくば

な

かた

しん

いっぼう

と中悪し。いかにしても白馬を鳴かせん方を信じて、一方を

われ

くに

うしな

うんぬん

とき

いつさい

げどうあつ

我が国に失うべし」と云々。その時に一切の外道集まつて、

はくちよう

げん

はくば

な

はくちようげん

白鳥を現じて白馬を鳴かせんとせしかども、白鳥現ずる

むかし

くも

い

きり

降

かぜ

ふ

なみ

ことなし。昔は、雲を出だし霧をふらし、風を吹かせ波を

立

み

うえ

ひ

い

みず

げん

ひと

うま

うま

ひと

たて、身の上に火を出だし水を現じ、人を馬となし馬を人と

いつさいじぎい

なし、一切自在なりしかども、いかんがしけん、白鳥を現

はくちよう げん

ずることなかりき。

とき めみようぼさつ もう ぶっし じつぼう しょぶつ きがん

その時に馬鳴菩薩と申す仏子あり。十方の諸仏に祈願せ

はくちようすなわ い きた はくばすなわ な だいおう

しかば、白鳥則ち出で来つて白馬則ち鳴けり。大王これ

き いろ すこ い きた ちから つ 膚 鮮

を聞こしめし、色も少し出で来り、力も付き、はだえもあざ

はくちよう はくちよう せん はくちようしゅつげん

やかなり。また白鳥また白鳥と、千の白鳥出現して、千

はくば いちじ にわとり とき はくちよう せん だいおう

の白馬、一時に鶏の時をつくるように鳴きしかば、大王こ

こえ き いろ にちりん はだえ つき

の声を聞こしめし、色は日輪のごとし、膚は月のごとし、

ちから ならえん はかりごと ぼんのう とき りんげん

力は那羅延のごとし、謀は梵王のごとし。その時に綸言

あせ
汗のごとく出でて返らざれば、いっさい 一切の外道等その寺をぶつじ 仏寺
となしぬ。

いま にほんこく

今、日本国またかくのごとし。この国は始めは神代なり。

ようや よ すえ

ひと こころま とん じん ちごうじよう

漸く代の末になるほどに、人の意曲がり貪・瞋・癡強盛

かみ ちあさ い りき すく

うじこ しゅご

なれば、神の智浅く威も力も少なし。氏子どもをも守護し

ようや ぶつぽう もう だいほう と わた

ひと

がたかりしかば、漸く仏法と申す大法を取り渡して、人の

こころ す かみ いせい つよ

ぶつぽう あやま おお

意も直ぐに、神も威勢強かりしほどに、仏法につき謬り多

しゅつたい ゆえ くに 危 でんぎようだいしかんど わた

く出来せし故に、国あやうかりしかば、伝教大師漢土に渡

にほん かんど がっし しょうぎよう かんが あ

愚

つて、日本と漢土と月氏との聖教を勘え合わせて、おろ

かなるをば捨て、賢きをば取り、偏頗もなく勘え給いて、

ほけきよう さんぶ ちんごこつか さんぶ さだ お そうら

法華經の三部を鎮護国家の三部と定め置いて候いしを、

こうぼうだいし じかくだいし ちしようだいし 「もう しようにんとう

弘法大師・慈覚大師・智証大師と申せし聖人等、あるい

かんど じ よ がっし じ よ

は漢土に事を寄せ、あるいは月氏に事を寄せて、法華經を

だいさん だいに けろん むみよう へんいきとう

あるいは第三・第二、あるいは戲論、あるいは無明の辺域等

お くだ たま ほけきよう しんごん さんぶ な

と押し下し給いて、法華經を真言の三部と成さしめて候い

よようや げこくじよう じやぎすで いつこく ひろ

しほどに、代漸く下剋上し、この邪義既に一国に弘まる。

ひととお あくどう お かみ い ようや めつ うじこ しゆご

人多く悪道に落ちて神の威も漸く滅し、氏子をも守護しが

ゆえ はちじゆういちないしはちじゆうご ごしゆ さいかい しず

たき故に、八十一乃至八十五の五主は、あるいは西海に沈

しかいす

こんじよう

だいき

ごじよう

み、あるいは四海に捨てられ、今生には大鬼となり、後生

むけんじごく

おたま

は無間地獄に落ち給いぬ。しかりといえども、このこと知れ

ひと

あらた

いま

にちれん

る人なければ、改まることなし。今、日蓮、このことを

粗々し

ゆえ

くに

おん

ほう

にちれん

あだ

たも

あらあら知る故に国の恩を報ぜんとするに、日蓮を怨み給

う。

お

うじめ

じふ

りんだおう

うじめ

これらはさて置きぬ。氏女の慈父は輪陀王のごとし、氏女

めみようぼさつ

はくちよう

ほけきよう

はくば

にちれん

は馬鳴菩薩のごとし。白鳥は法華経のごとし、白馬は日蓮

なんみようほうれんげきよう

はくば

な

だいおう

き

がごとし。南無妙法蓮華経は白馬の鳴くがごとし。大王の聞

いろ

さか

ちから

つよ

かこ

じふ

うじめ

こしめして、色も盛んに力も強きは、過去の慈父が氏女の

なんみようほうれんげきよう

おんこえ

き

ほとけ

な

たも

南無妙法蓮華經の御音を聞こしめして仏に成らせ給うが

ごとし。

こうあんさんねんはちがつじゅうよつか

弘安三年八月十四日

にちれん

かおう

日蓮 花押

うつぶさのようぼうごへんじ

内房女房御返事